兵庫県における女子陸上競技大会のはじまりと普及

——特に新聞社のかかわり（1923－1926年）に着目して——

赤　坂　美　月

Ⅰ．はじめに

兵庫県において女子の運動競技はどのようにして発展してきたのか。筆者はこれまで，明治34（1901）年，兵庫県で初めての公立女学校として開校された兵庫県立第一神戸高等女学校（以下「県一高女」と略）[注1]に注目し資料を収集してきた。それは，兵庫県における女子の運動競技のはじまりにおいて同校の活動が先駆的役割を果たしたと考えられるからである。

県一高女においては，開校当初から「身体の強健なる女子生徒」をつくるために，学科目「体操」以外にもすべての生徒が各種運動に取り組んでいた[1]。その後，大正８（1919）年７月，同校初めての対外試合となる大阪時事新報社主催の関西女学校庭球大会に「新聞社から再三の依頼に」出場した[2]。

同年５月には，大阪毎日新聞社神戸支局主催による「婦人や児童に新運動を勧奨す」「バレーボールのコーチ開始」とされたバレーボールの指導を受け，12月，「我社が我国初めての試み」と同支局が主催した女子バレーボール競技大会に出場した[3]。

大正12（1923）年には，女子の陸上競技大会[注2]に出場している。これに関する資料のなかで，「陸上競技は開校当時よりその萌芽と認むべきもの行はれしが，当時の社会は今日の如く女子競技を歓迎せざりしを以て，……大正十

二三年頃に至るも，尚未だ陸上競技部としての独立を見ず」，大正14（1925）年6月，「神戸高商主催の女子中等学校陸上競技大会の第三回に出場することゝなりてより，漸やく陸上競技部の独立を認めらる」といった記述[4]がみられる。

各種陸上競技関係の資料を確認したところ，第1回の兵庫県女子中等学校陸上競技大会に関しては大阪朝日新聞神戸附録にその詳細が記されていた。4月29日，兵庫県女子体育協会主催・大阪朝日新聞社神戸支局後援，神戸高等商業学校（以下「神戸高商」と略）での実施であった[5]。本大会も事前に新聞社員による技術指導が行われている。

これらのなかで注目されることは，いずれも新聞社が主催または後援した大会であること，兵庫の2大会は当時新聞社が技術指導も行っていたこと，女子競技が世間的に歓迎されないなかで最初の陸上競技大会への取り組みであったことである。

兵庫県における女子の陸上競技大会のはじまりは全国的にみてもはやい。当時，兵庫県（神戸市）には女子の陸上競技大会を実施できる基盤があった。

日本の男子はすでにオリンピックや極東大会に出場している。当時の兵庫県は，第2回大会（大正4・1915年）への岡本栄二郎（神戸高商）をはじめとして極東大会へ多数出場しており，神戸高商は大正7（1918）年，第1回中等学校優勝陸上競技大会[注3]を開催するほどの状況にあった[6][7][8]。

一方，女子の陸上競技大会のはじまりについて，竹之下は大正11（1922）年の東都女子青年会の大会にはじまり[9]，佐々木は大正11年はじまりの東京キリスト教青年会主催女子連合競技会の第3回大会（大正12・1923年）を純然たる競技会の形式での実施とし，この頃から全国各地で大小，様々な女子の競技会が開催されるようになったと「大阪・神戸・岡山・新潟・秋田・静岡・鳥取」をあげている[10]。

これら女子の陸上競技大会とされるものを確認した[注4]が，大正11（1922）年の第3回広島県女子体育大会（6月・大阪朝日新聞社広島通信部後援），第

1回岡山県女子体育大会（10月・大阪朝日新聞社岡山通信部主催），第1回全日本女子選手権陸上競技大会（11月12日・東京朝日新聞社後援），大正12（1923）年の兵庫の第1回大会の後援と，4県で朝日新聞社のかかわりがあった。

大阪朝日新聞神戸附録には，この兵庫の大会に関し，大会の審判委員である多田（後出）の「東京と比較……今回の大会が示した各種競技記録を昨秋十一月十二日東京戸山学校グラウンドに於ける全日本女子陸上競技選手権大会の記録と比較」[11] と前年の大会を意識した記述がみられる。

当時の兵庫県において，大会を主催する側からすれば，陸上競技にかかわる人物は豊富に存在しており，出場する女学校・生徒の確保が出来れば大会は可能であったということになる。そして，この大会が成功したならば，新たな競技大会の可能性も高いうえに女子の運動競技の発展に弾みをつけると考えたのではなかったか。

そこで，大正12（1923）年，兵庫県において初めて実施された女子の陸上競技大会について，特に新聞社の後援という点に着目しつつ，そのはじまりと普及の実態について明らかにしたい。第1回大会については，大会の目的，主催者側の大会への方策として新聞による報道・新聞社員による練習会，大会の状況を検討する。また本大会は，同主催・後援で，昭和2（1927）年，兵庫県女子体育連盟主催となる前年まで実施されており，それまでの出場校を確認することによって，陸上競技の兵庫県内での普及をみる。

主な資料として大正12（1923）年から大正15（1926）年までの大阪朝日新聞神戸附録（大正14年から神戸版となっている）を取り上げる。なお，引用文の漢字については旧字体を新字体に改めた。

II．第1回兵庫県女子中等学校陸上競技大会について

1．大会の目的

最初の案内文（3月17日）は次のように記されている[12]。

全県下中等学校　女子陸上競技大会　四月二十九日（日曜）　神戸東遊園地にて

女子体育の黎明期に際して

男子に必要な剛健闊達の気風，之は其の母体から健康なる身体と共に生れなければなりません。健全な母体を作り快活剛壮の気象を養ふものは，運動体育の隆盛であります，智の教育，徳の教育，情の教育，一つとして女子に必要でないものはありません。然も今日に於ける我国の女子に対しては実に運動体育の奨励を喫緊の事とします。兵庫県女子体育協会はこの女子運動の黎明期に当つて，斯界に有意義なる衝動を与へる為，今回県下で最初の最も組織立つた女子競技大会を開くことゝなりました，時は正に桜花梢頭に爛漫の美を誇る絶好の運動季節，東遊園地に花と咲く若き学生の晴れやかな技は蓋し全県下の視聴を集める事でせう。各女学校選手が奮つて参加し，優秀なる女子の記録を印せられん事を切望します。

競技種目

トラツク　　五十メートル　百メートル　四百メートルリレー

フ井ールド　走幅跳　走高跳　ホツプ・ステツプジヤンプ　バスケツトボール投

参加校

県立神戸高等女学校　神戸市立第一高等女学校　神戸市立第二高等女学校　日本精華高等女学校　明石女子師範学校　市立明石高等女学校　県立加古川高等女学校　県立姫路高等女学校

競技規則

原則として大阪朝日新聞社編大正十一年度競技規則に拠りますが詳細は順次発表します

主催

兵庫県女子体育協会

後援

大阪朝日新聞神戸支局

大正8（1919）年の大阪毎日新聞社主催による第1回女子バレーボール大会は，神戸市内の6校の出場[13]であったが，本大会は，出場予定8校のうち半数は神戸市以外の比較的近辺の学校である。

本大会の目的は，「綱領」（表2）にあるように，「毎年一回之を挙行し女子体育の隆盛を期する事」である。

当時は女子体育の黎明期，運動体育の奨励が喫緊のこととされた。この女子体育とは，「男子に必要な剛健闊達の気風」「健康なる身体」をもった男子が生まれるための，「健全な母体を作り」「快活剛壮の気象を養う」女子の運動体育ということである。

また水島大会会長（後出）は，大会の選手入場式に台上で，「女子の健康が非常に重大になつたことは申すまでもなく，母性であるといふ点から見れば或ひは男子より，より以上に重大であるかも知れぬ」として，その健康を保持することは運動競技によることが一番と大会の開催を喜び，「一方女子になくてはならぬ温和さも体育と併せて練磨して欲しい」と話している[14]。

このようなことから，兵庫県女子体育協会は，「斯界に有意義なる衝動を与へる」ために，県下で最初の最も組織立った女子競技大会を開くことにしたというものである。

つまり，女子体育の内容として運動競技をとらえ，母体としての健康を念頭におき，運動競技が盛んになることが女子体育の隆盛につながると考えられた。実際には，大会に多くの生徒が参加し，観衆が見守る中で女性らしさを保ちつつ「晴れやかな技」を競い，優秀な記録が出ることを期待した。

表１　第１回兵庫県女子中等学校陸上競技大会に関する記事
（大阪朝日新聞神戸附録）

主な内容	日にち（大正12年）
大会の案内から大会当日まで	
大会の案内	3.17，3.19，3.24，4.2，4.16，4.17
練習会と練習会報告	3.18，3.19，4.11，4.12，4.13，4.14，4.20 4.21，4.22，4.23，4.24，4.25，4.26，4.27
大会規則，女子陸上 競技細則	3.26，3.27
大会最終案内，綱領・順序・規則・役員	4.27，4.28，4.29
大会終了後	
大会の様子と競技結果	4.30，5.1，5.2
３名（矢島，多田，渡邊）の記事	4.30，5.2，5.3，5.4，5.5

注：３月25日分は欠号であった。

２．大会への方策

1）新聞による報道

第１回大会に関する記事は，大会の約ひと月半前の３月17日から５月５日までと長期にわたり多くの写真を添えて掲載があった。主な内容と日にちを整理し「大会の案内から大会当日まで」と「大会終了後」に区分し表１にまとめた。

それは，大会の告知にはじまり，大会に向けて伝える内容を順序立て，内容によってはくり返し，競技の結果，審判委員らの大会評までを掲載して読者を注目させた。主なところを取り上げてみる。

４月となり，「大会規則は二十五日に競技細則は二十六日の紙上に発表いたしましたから選手の方々はよく御熟読下さい」[15] であるとか，出場７校の練習の様子を「女子陸上競技大会前記（一）～（七）」として掲載し，「連日の紙上『大会前記』で遺憾なく報道紹介した，サテあの前記を総括して大会当日の形勢に思ひ及ぼすと各校共に一長一短」[16] と参加校・選手への伝達の役割も果たし意気をも高めた。

大会が迫った４月27日，「空前の大接戦となる事は明かで関西最初の女子競技は頗る興味深く真に男子を凌ぐ緊張振りを見せるだらうと予想」とここで関西最初としている。また，「女子競技大会の歌」の掲載もある[17]。

大会前日には，「吾等の為すべき事，いふべき事を盡した」として，後は選手が各地での女子記録に対しどんな結果を出すかにあると記している[18)]。

大会翌日は，「水島会長の訓示，五十米予選のスタートを切る・決勝点に入る，走幅跳」など多くの写真がその状況を伝えている。

見出しは「『栄ある使命，をとめごの』 斯界に刻みつけた大記録 『春の光は，かゞやかに，草木は芽ぐむ』 筒台高商グラウンドに於ける　女子中等生陸上競技大会」，「母なる大地を力強く踏む　選手姿花やかに　大会の歌をたからかに合唱　厳粛なる選手入場式」，「精神美と肉体美を　遺憾なく発揮　幻の花にも粉ふ美しい観衆」といったものである。

また，同じ紙面に，矢島兵庫県体育主事[注5)]の「女子オリムピツク競技に対する感想及び希望」がある。その一部を次に取り上げた。

> 其本質から考へ新らしい時代の要求から見て女も人として解放されなければならないといふ事は体育上にも道理である。新時代の体育の傾向は選手より一般へ，階級より民衆へ，青年より老幼へ，男より女へと其の普及の歩調を進展して居る。女も男と同じく体育の機会均等に浴せんとする事は世界の婦人自らが覚醒して来た痛快なる現象である……
> 我国に於ては相当思慮ある人の口から「娘が御転婆になるとか，もう十五六にもなるのに一向娘らしくないとか，女性美を失ふとか」いふ風の非難を聴く……この一面は正しく現代体育の弊害の点を物語つて居るものとして警戒反省しなければならないが然も其の一面には伝統的の因襲に支配されてゐる点も否むことが出来ない観がある……女子体育振興に対する今日の彼是の沙汰は何時の世にも出た批難であつて夫れは運動競技そのものゝためではなく其の副次的方便に因はれた結果である。

さらに，女子の体育運動において「其の本質を女子の性格及道徳の上に発揮すべく活用する時は益々女性の美を発揮する」，また，運動競技に臨むにあたっ

て「飽くまで運動道徳の精神を発露して欲しい」，勝敗は第二として「其の経過を麗はしくなす事を専念して」と女性らしさのなかで競技に取り組むことと競技に取り組む姿勢の2点を求める記述がみられる[19]。

後日，多田徳雄「女子競技大会評―フイールド競技に就いて―」・「女子競技大会評―体操教師に望みたき事―」，渡邊生（後出の審判委員渡邊文吉と思われる）「女子競技大会評―トラツクを見て―」の記述がある[20]。

このなかで渡邊も「選手の方々が飽くまでも女性としての立場を忘れないスポーツに対する十分な理解と愛好の念は終始一貫したその立派な態度によつて十分窺知する」とし，「この方面への女性の進歩を杞憂し非難のためにのみ非難せんとする一部の人々に明確なる暗示と得難い啓発の手綱を与えた事と信じます」と記している[21]。

このように新聞は，女性役割・女性らしさを求めるなかでの陸上競技大会の必要性とはじまりを伝えたのであった。

2）新聞社員による練習会

大会での選手の技術力向上のためと思われるが，新聞社員による練習会が行われていた。しかも大会告知翌日の18日に，第一回の練習会（県女・市立第一・第二・精華高女）を神戸市立第一高女校庭で「本社運動部員指導の下に開きます」とあり，市外は19日に明石女子師範で実施予定[22]と事前に計画されていたと思われる。

翌日の記事には「凛々しい　乙女の練習」の見出しと大きな写真の掲載である。雨のため屋内体操場で「本社員北村君の熱心な指導の下に行つた」とある。出場予定のない親和高女，神戸女学院も参加したようで，先生方と各校の選手候補者とされている。

その様子は「女子のオリムピツク競技は県下は勿論我が国に於ても未だ十分普及してゐない事とて説明は非常に困難であつたが北村君は先づ短距離競走の要領を説いて」と次のように続いている[23]。

スタートの姿態を実際に示すと，熱心に聞いてゐた生徒達はもう自分でやつて見た相にしてゐる。北村君はそれと察して要領を説明しては練習に移る女子だけに最初は恥かしさうに馴れないスタートの容態をしてゐたがいつの間にか平気になつて少しでも多く要領を会得しやうと北村君を取り巻いて姿態を訂正して貰つてゐる……走幅跳，走高跳，ホツプ・ステツプ・ジヤンプになると一寸要領を説明された丈でもう上手なもの。……「走幅跳の秘訣は遠く飛ばうとせずに高く飛ぶ様になさい。するときつと日本のレコード位は破れますよ」と北村君が云ふと生徒達は「ワ……」と晴れやかに笑つた。

4月に入り，各学校は新学期開始と共に猛烈な練習を始めているとして，第二回練習会を12日，同じ神戸市立第一高女校庭で参加校全選手のために開くとされている[24]。

翌日はその報告である。「強風を蹴飛ばして　少女達の猛練習　進績コーチヤを感心さす」とあり，「練習はまだ日浅いけれどもう要領を得たものでコーチヤーの渡邊君を感心さして」と第二回は渡邊の指導である[25]。

3．大会の状況

1）大会役員

本大会の「役員」（表2）である会長水島銕也，審判長小川忠蔵について，水島は神戸高商初代校長，小川は同校陸上運動部の部長であった[注6]。

大会委員には県・市の職員，女学校校長・教頭6名の名前がある。

審判委員は21名であるが，所属の確認が出来た13名を表3に取り上げた。最初の4名は極東大会に出場した陸上競技の名選手である。「東口眞平」は，大正12（1923）年，大阪朝日新聞社運動部長に就任している[26][27]。渡邊文吉は，大正12（1923）年，地元の関西学院を卒業し，朝日新聞社に入社とある[28][29]。

また，先に取り上げた「大会前記」には名字しかないが，生徒を指導，また

表２　第１回兵庫県女子中等学校陸上競技大会

綱領　一．兵庫県女子体育協会主催，大阪朝日新聞神戸支局後援県下女子中等学校陸上競技大会は原則として毎年一回之を挙行し女子体育の隆盛を期する事を目的とする

二．優勝校には優勝旗の保管権を与ふ

三．参加選手は女子学生の品位を保たねばならぬ

四．特に請待した男子の外一般観覧は女子に限る

順序（午前十時開会）

一選手入場式

一会長宣言

一大会の歌（選手合唱）

一選手合同体操

一競技開始

1　五十米突予選（三回）

2　走幅跳

3　百米突予選（三回）

4　走高跳

5　四百米突リレー予選（二回）

Ａ組（第一高女，明石女師，明石高女）

Ｂ組（県立高女，第二高女，甲南高女，精華高女）

＝休　憩＝

6　五十米突決勝

7　バスケツトボール投

8　百米突決勝

9　ホツプ，ステツプ，ジヤンプ

10　四百米突リレー決勝

一優勝旗及賞牌授与

一競技会の歌合唱（奏楽）

一閉会

規則　◇出場選手人員

一競技に付き一校より三人以下（リレー四人）但し一人二種以上出場する事はできません（リレーは此限りではありません）

◇競技得点

一等（五点）二等（四点）三等（三点）四等（二点）五等（一点）

四百米リレーは四等迄とし得点は一等（七点）二等（五点）三等（三点）四等（一点）

但し予選は得点に入りません

◇優勝校

各競技の通算得点の最高校を優勝校とします。但し最高校同点の場合は一等の多い方，一等同数の時は二等の多数の方を優勝とします

◇優勝旗

優勝校は優勝旗を次回まで保管する権利があります，但し三回連続して優勝した時，優勝旗は該校の所有に帰します

◇服装（注意）

上衣に袖のある事（長短随意）靴下，猿股を着ける事（猿股は成可く黒色を主とします）但し靴にスパイクをつける事は絶対に禁じます

◇応援

応援は拍手の外絶対に禁じます

役員　会　長　水島銕也氏

審判長　小川忠蔵氏

大会委員　県学務課長　古川静夫氏

市教育課長　本庄太一郎氏

県立高女校長　篠原辰次郎氏

神戸第一高女校長　井澤長十郎氏

神戸第二高女教頭　渡邊博道氏

日本精華高女校長　中川四一氏

審判委員　東口眞平氏，多田徳雄氏，北村栄二郎氏，渡邊文吉氏，岡坂豊蔵氏，進藤正之氏，三枝祐龍氏，肥後延寿氏，上林栄太氏，金藤隆義氏，鈴木省三氏，南波九一氏，楫田栄太氏，谷門文吉氏，足立悦治氏，濱野茂氏，高宮亀喜氏，栗田健二郎氏，中野欽六氏，三浦義蔵氏，岩佐留吉氏

大阪朝日新聞神戸附録大正12年4月28日より

表3　第1回兵庫県女子中等学校陸上競技大会（審判委員）

氏　名	所　属
東口眞平	朝日新聞社
多田徳雄	神戸高等商業学校
北村（岡本）栄二郎	神戸高等商業学校出（陸上運動部）
渡邊文吉	朝日新聞社
岡坂豊蔵	第3代神楽小学校校長
上林栄太	甲南高等学校
南波九一	県立神戸高等女学校（大正14年～）
楫田栄太	日本精華高等女学校
谷門文吉	神戸市立第二高等女学校
足立悦治	兵庫県明石女子師範学校
濱野茂	甲南高等女学校を指導の小学校の先生とある
高宮亀喜	県立神戸高等女学校
栗田健二郎	兵庫県明石高等女学校

日本バレーボール協会五十年史
スポーツ人風土記（兵庫県上巻）
県一高女『創立三十周年記念誌』
大阪朝日新聞神戸附録大正12年4月20日～4月27日より作成

女学校関係者と思われる「濱野茂」ら9名の名前がみられた。そのうち1名は大会委員の渡邊教頭で「非常に熱心」とあり，審判委員に6名が入っている。

主催である「兵庫県女子体育協会」の詳細は確認出来なかった。本大会が「神戸高商主催」の大会と県一高女の記念誌に記されていること，大会前に朝日新聞社員が技術指導を行い，大会終了後に小川審判長が「朝日新聞の努力で第一回が無事に而もこれほど盛会に済んだ」とする記述があること，また選手入場式で県一高女の「高宮氏の指揮で最も鮮かな数番の選手合同体操」が行われたと記されていることなど[30]から，これら人物の中心的関わりが考えられる。

2）大会規則・女子陸上競技細則

3月下旬に「女子陸上競技の大会規則決定」として「大会規則」と「女子陸上　競技細則」の掲載がある[31]。

大会前日となり，「綱領・順序・規則・役員」（表2）が掲載されている。

3）大会の様子と競技結果

当日は競技日和，「入場は御婦人に限ります」とされた大会は応援席を鈴なりに埋められた午後2時開始され，終了は午後6時40分とある。出場校は最終的に7校97名の選手とされている。当初出場予定であった県立加古川高女・県立姫路高女は出場せず，甲南高女が出場している。場所は予定の東遊園地から神戸高商に変更されている。

総合優勝は神戸市立第二高女であった。「戦跡を顧みて＝女子陸上競技大会＝」として各校の印象を，「県立高女－高跳の雄」，「明石女師－堂々の陣」，「日本精華―貴い一点」，「神戸第一―決勝で失敗」，「甲南高女―全体の統一」，「神戸第二―順調の勝」，「明石高女―若い猛者」とその詳細を記している。そして，「女子競技記録」として各種目の予選と決勝の結果を掲載している[32)33)]。

各女学校は体育としての陸上競技を受け入れた。先の「新聞による報道」に取り上げたように，大会の主役である女子生徒の競技に取り組む姿が大会を支え，次年度の開催を可能にしたのではなかったか。

4）女子の陸上競技の兵庫県での普及

まず第2～4回大会に関する主な記事を取り上げた。大正13（1924）年の第2回大会は，前年を確認するように，女子体育の黎明期に当たって，斯界に新たなる衝動を与えるために第1回大会を挙行した。先例のない試みであったにもかかわらず最も緊張した興味の中に行われ多大の成果を収め得た。そしてまた春を迎え，「母性の健全なる体躯と快活なる気象とを念ふこと愈痛切なるもの」として，女子教育に携わる人々は最も心をこの点に注ぎ，この競技を続けることの「喫緊なるを惟う」としている[34)]。

この年も練習会を6日間開催とあるが，初出場で遠方の篠山高女，西宮高女，龍野高女では渡邊の指導が行われている[35)]。また，大阪朝日新聞神戸通信部[注7)]主催として大会参加校選手のための映画「オリムピツク予選大会『晴れの巴里へ』」が5月5日，神戸市立第二高女にて上映され約百名が来観，

盛会であったとされている[36]。

大会当日の小川審判長の宣言演説としたものには，「女子は長い間競技の潮衆であつた，今や女子は自から競技を行ひ其の技漸く進歩して来た。……諸子は終始明るい気持で，正々堂々と競技を行はねばならぬ」とある[37]。

大正14（1925）年の第3回大会は5月24日予定であったが，北但大震災のため6月14日に延期されている。最初の案内文に，「県下の女子学生を選つて母性改造に，或は健康美の発揚に多くの衝動を与へて来た」とあり，前の2大会の好記録続出に本大会の地位は既に日本的に認識されたとしている[38]。

また3年目となり，各女学校生徒の「女子体育」に新たなる衝動を与え，且つ非常なる進境を見たことは，主催者並びに後援者は非常なよろこびとしている[39]。さらに，4月の日本女子オリンピック大会において神戸市立第二高女が二百米リレーで28秒4の新記録をつくり優秀な成績を収めている[40]とあるが，優勝している[41]。

大会前日には，「覇を争ふ日は來た！　百七十の乙女子が力一ぱい　技を闘はす」の見出しがあり，昨年作った日本記録はすでに各地方で破られ記録保持者の栄誉を回復しなければならないが，それは本大会の第二義であって，「要は女子の自由と潤達とを運動精神に則つて最も愉快に発揮し得ば所期の目的を達したといつてよい」としている[42]。

第4回大会（大正15・1926年）は，第1回大会と比べると記事は少なく9日間の掲載であった。記事には，「わが女子陸上競技大会が女子体育のパイオニーヤーとして生れでゝからその過去三年間，本大会のみならず女子体育界は実にめまぐるしいばかりの発達……。母性の光，少女のほこりは……その色彩を添え生々と伸びて……。健康と美……それは女性の全て」[43]，「大正十二年女子競技界の草分として生れるや関西地方の女子運動熱は一躍抬頭しすさまじい勢ひをもつて普及」[44]と第1回大会の意義と女子体育界の発達を記している。また大会は，「極東オリムピツク大会にバレーボールの代表チームとして出場して名をなした姫路県立高女を加え」[45]ともある。

表4　兵庫県女子中等学校陸上競技大会出場校

	学校名	第1回 大正12.4.29	第2回 大正13.5.18	第3回 大正14.6.14	第4回 大正15.5.23
1	県立第一神戸高等女学校	○		○	
2	神戸市立第一高等女学校	○	○	○	○ 優勝
3	神戸市立第二高等女学校	○ 優勝	○ 優勝	○ 優勝	○
4	日本精華高等女学校	○			
5	兵庫県明石女子師範学校	○	○	○	
6	兵庫県明石高等女学校	○	○		
7	甲南高等女学校	○	○		
8	西宮市立西宮高等女学校		○		
9	神戸成徳高等女学校		○		○
10	神戸市立女子商業学校		○	○	○
11	県立篠山高等女学校		○	○	○
12	県立社高等女学校		○	○	
13	県立龍野高等女学校		○	○	○
14	高砂町立高砂実科高等女学校			○	
15	県立姫路高等女学校				○

大阪朝日新聞神戸附録（神戸版）大正12・13・14・15年より作成
注：学校名は大正15年時のものである。

これら4大会を通して常に「母性」という言葉がみられる。また，大会規則について，第3回大会から「大会規定」となるなど内容に見直しがみられ注8)，優勝校のゆくえや各種目の記録に関する記述が増えている。

次に，第1回から第4回大会までの出場校を表4に取り上げた。毎年のように大会当日まで取り消しや追加出場がみられ，選手確保の問題や学校行事との日程重複など理由が記されているが，大会終了後の学校別得点表に記載のある学校を出場校とした。

すべて出場しているのは，神戸市立第一高女と神戸市立第二高女の2校のみであった。第2回大会以降の出場校は，11校，9校，7校と変動がみられるが，神戸市立女子商業学校，県立篠山高女，県立龍野高女が常時出場を果たしている。

また，出場校の地域をみると，大正15（1926）年には，東は西宮，西は龍野，北は篠山といった遠方からの出場があり，陸上競技の兵庫県内での普及がみられる。この4年間で大会に出場したのは15校[注9]であった。

この女子の陸上競技大会はじまりの大正12（1923）年，第6回極東大会（大阪）のオープン競技女子排球において県立姫路高女が優勝[注10]していること，大正13（1924）年からの日本女子オリンピック大会に兵庫県勢が出場し活躍していること，さらには，本大会と同じ主催・後援で大正14（1925）年に籠球，大正15（1926）年に庭球の大会が実施されるなど，女子生徒を取り巻く運動競技界の活性化は，女子生徒たちに大きな目標を与えより積極的な活動となったのではないだろうか。

Ⅲ．ま　と　め

女子体育の黎明期とされた大正12（1923）年，兵庫県神戸市において，兵庫県女子体育協会主催・大阪朝日新聞社神戸支局後援で女子の陸上競技大会がはじまった。

大会の目的は，本大会を開催することが女子体育界に有意義なる衝動を与え女子体育の隆盛につながるというものであった。女子体育の内容として運動競技をとらえ，運動競技大会の発展が目指された。そのための「女子競技を歓迎せざりし」なかでの陸上競技大会の開催であった。

当時兵庫県には先駆けて大会を実施出来る基盤があった。男子陸上競技界の活発な状況，参加対象となる学校数の多さがあげられよう。そして，本大会開催において朝日新聞社が重要な役割を果たしている。元陸上競技選手の社員が事前に技術指導を行い，大会の審判委員でもあったこと，また，大会の告知から終了まで，大会に関する情報伝達という大きな役割である。大会は7校97名が参加し盛会に終わったとされているが，新聞に掲載の大会の様子や出場校を意識して，第4回大会までに15校が出場と，その後の参加校・選手が増えていったのではなかったか。

このように，大正期，女子陸上競技大会のはじまりと普及において，大会運営と情報伝達という点で新聞社のかかわりが不可欠であったことになる。

そして何よりも，大会に出場し競技に取り組んだ女子生徒たちの存在が女子運動競技発展の道を開いた。女性役割・女性らしさを求められるなかでの取り組みであったが，陸上競技の魅力を経験したことに意義がある。

兵庫県において主導するのは新聞社・運動競技関係者，その担い手は女学校・生徒という女子運動競技大会の一つの成り立ち，こうした大会の発展によって女子の運動競技界がつくられていった。日本のなかでも先駆けて女子の大会を実施することが出来た地域の大会・選手が全国規模の大会を支えることにつながる。

おわりに，昭和2（1927）年，兵庫県女子中等学校体育連盟主催での大会の詳細，その他団体による大会のはじまりなど今後の課題としたい。

注記

注1）当初は兵庫県高等女学校と称し，明治34（1901）年4月に兵庫県立高等女学校，明治43（1910）年に兵庫県立神戸高等女学校，大正14（1925）年に兵庫県立第一神戸高等女学校と改称した。兵庫県立第一神戸中学校と県一高女が合併し，昭和23（1948）年9月，兵庫県立神戸高等学校となる[46]。

注2）來田は陸上競技について，他の種目よりは比較的早期に，小規模なものであったとはいえ女性だけの競技会を開催していた。また，大正期の女性の競技会の開催状況からは，男性競技会でのオープン参加にはじまり，種目別の小規模な競技会が開催されるようになり，次第に総合的な大会，全国規模の大会へと発展していったと考えられるとしている[47]。

注3）竹之下は中等学校は大正7（1918）年，神戸高商主催の全国大会に始まりとしている[48]。

神戸高商，現在の神戸大学体育会陸上競技部・凌霜陸上競技部O・B会『五十年史』には「神戸高商黄金時代のエネルギー」は全国中等学校陸上競技大会を企画開催したことであり，「大正時代であったればこそ，一学校がこんな大規模なことが実行出来たのであろう。朝日新聞社の後援や各大学諸先輩のご協力に依ったことは勿論」とする記述がみられる[49]。

また，大正11（1922）年10月1日，東遊園地にて神戸新聞社主催の第1回兵庫県中等学校陸上競技大会が開催されている[50]。

注４）『近代陸上競技史（中・下巻）』（山本）・『運動年鑑』（大正12年度）から確認出来たものは大正11年度６大会，大正12年度11大会であった。その地域は東京，広島，岡山，大阪，兵庫，秋田，岩手，新潟，山口，鹿児島，静岡，香川である。

山本によれば，大正11（1922）年の第１回全日本女子選手権陸上競技大会は，永井道明を会長としてその年に設立された大日本体育同志会主催・東京朝日新聞社後援の大会ということである[51)52)]。また來田によれば，同大会は競技種目にバスケットボール，バレーボールの球技も含まれているということである[53)]。

注５）大正11（1922）年，矢島鐘二はわが国における県職員として最初の体育主事ということである。大正12（1923）年５月，県一高女において「体育に関する話」を行っている[54)]。大正12年度の県一高女では，学級数19，生徒数937名，入学者数200名・志願者数767名とある[55)]。

注６）前出の『五十年史』に「神戸高商陸上運動部育ての親」初代校長水島銕也先生，「歴代部長」として初代大山爾也先生，第二代小川忠蔵先生とある[56)]。

注７）大阪朝日新聞神戸支局の名称が大正13（1924）年神戸通信部，大正14（1925）年神戸通信局，大正15（1926）年神戸通信局となっている。

注８）例えば第4回大会では「参加資格と選手人員」として，「兵庫県下女子中等学校たること（中等学校とは広い意味に解し小学校卒業生の入学する独立した学校であれば差支へありません）」の記述がみられる[57)]。

注９）『兵庫県教育史』によれば，大正15（1926）年，県内の高等女学校の30校（県立13，市立６，町立２，私立９）と実科高等女学校10校（公立９，私立１）をあわせると，計40校，生徒数１万4,426人となり，男子中学校の18校（公立14，私立４），生徒数１万2,160人をしのぐものであったとされている[58)]。

注10）『運動年鑑』（大正14年度）には「大正十二年五月……第六回極東大会に優勝した日本女子選手の奮闘は延いて女子運動覚醒の警鐘を乱打する事となり，更に九月関東大震災の結果として女子体育振興の要は一般に痛感せられて，十三年の女子運動界は目醒しく興隆の機運を生んで『女子に男子同様の競技は』とて，省みられなかつた女子の陸上競技は漸く普及されんとし，従来行はれて来た庭球，藍球，水泳など，と共に一般女子の運動は今や全国津々浦々に迄一斉に奨励され」とある[59)]。

引用文献

１）赤坂美月・永木耕介・千駄忠至（2006）旧制女学校における「体育」の定着過程に関する研究――兵庫県立第一神戸高等女学校の事例――．実技教育研究第20号，兵庫教育大学実技教育研究指導センター，pp. 79-88.

２）（1919）会報第十四号．兵庫県立神戸高等女学校同窓会，p. 36.

３）赤坂美月（2008）旧制女学校における課外のスポーツ活動の進展過程に関する研究――新聞社主催の大会（1919年）がもたらしたもの――．神戸学院経済学論集第39巻第３・４号，神戸学院大学経済学会，pp. 39-71.

4）(1932) 創立三十周年記念誌．兵庫県立第一神戸高等女学校・校友会・欽松会，p. 383.
5）大阪朝日新聞神戸附録．1923年4月30日．
6）棚田真輔（1975）スポーツ人風土記（兵庫県中巻）．道和書院，p. 179，p. 166.
7）山本邦夫（1982）日本陸上競技史．道和書院，pp. 416-417.
8）山本邦夫（1992）近代陸上競技史（上巻）．道和書院，p. 753.
9）竹之下休蔵（1950）二十世紀日本文明史　体育五十年．時事通信社出版局，p. 203.
10）佐々木等編著（1971）近世日本女子体育・スポーツ発展史．二階堂学園，pp. 21-22.
11）大阪朝日新聞神戸附録．1923年5月2日．
12）大阪朝日新聞神戸附録．1923年3月17日．
13）前掲書3)．pp. 54-55.
14）前掲書5)．
15）大阪朝日新聞神戸附録．1923年4月2日．
16）大阪朝日新聞神戸附録．1923年4月28日．
17）大阪朝日新聞神戸附録．1923年4月27日．
18）前掲書16)．
19）前掲書5)．
20）大阪朝日新聞神戸附録．1923年5月2・3・4・5日．
21）大阪朝日新聞神戸附録．1923年5月4日．
22）大阪朝日新聞神戸附録．1923年3月18日．
23）大阪朝日新聞神戸附録．1923年3月19日．
24）大阪朝日新聞神戸附録．1923年4月11日．
25）大阪朝日新聞神戸附録．1923年4月13日．
26）熊本陸上競技史．p. 11.
27）前掲書8)．pp. 520-521.
28）関西学院大学体育会陸上競技部ホームページ．
29）前掲書6)．p.188.
30）前掲書5)．
31）大阪朝日新聞神戸附録．1923年3月26日．
32）前掲書5)．
33）大阪朝日新聞神戸附録．1923年5月1・2日．
34）大阪朝日新聞神戸附録．1924年4月22日．
35）大阪朝日新聞神戸附録．1924年4月29日，5月・5・6・7日．
36）大阪朝日新聞神戸附録．1924年5月6日．
37）大阪朝日新聞神戸附録．1924年5月19日．
38）大阪朝日新聞神戸附録．1925年4月29日．

39）大阪朝日新聞神戸附録．1925年５月20日．
40）大阪朝日新聞神戸附録．1925年５月21日．
41）（1926）大正十五年度運動年鑑．株式会社朝日新聞社．p. 227.
42）大阪朝日新聞神戸附録．1925年５月23日．
43）大阪朝日新聞神戸附録．1926年４月24日．
44）大阪朝日新聞神戸附録．1926年５月10日．
45）大阪朝日新聞神戸附録．1926年５月22日．
46）前掲書1）．p. 86.
47）來田享子（1996）日本女子オリンピック大会と女性競技スポーツ参加促進運動——第１回大会を中心に——．日本体育学会体育史専門分科会体育史研究13号，p. 40.
48）前掲書9）．p. 202.
49）（1966）五十年史．神戸大学体育会陸上競技部・凌霜陸上競技部Ｏ・Ｂ会，p. 68.
50）山本邦夫（1992）近代陸上競技史（中巻）．道和書院，p. 1520.
51）同前．p. 1588.
52）（1925）大正十二年度運動年鑑．株式会社朝日新聞社．p. 211.
53）前掲書47）．p. 51.
54）前掲書1）．pp. 83-88.
55）前掲書4）．pp. 60-61.
56）前掲書49）．pp. 1-7.
57）前掲書43）．
58）（1963）兵庫県教育史．兵庫県教育委員会，p. 422.
59）（1925）大正十四年度運動年鑑．株式会社朝日新聞社．p. 52.